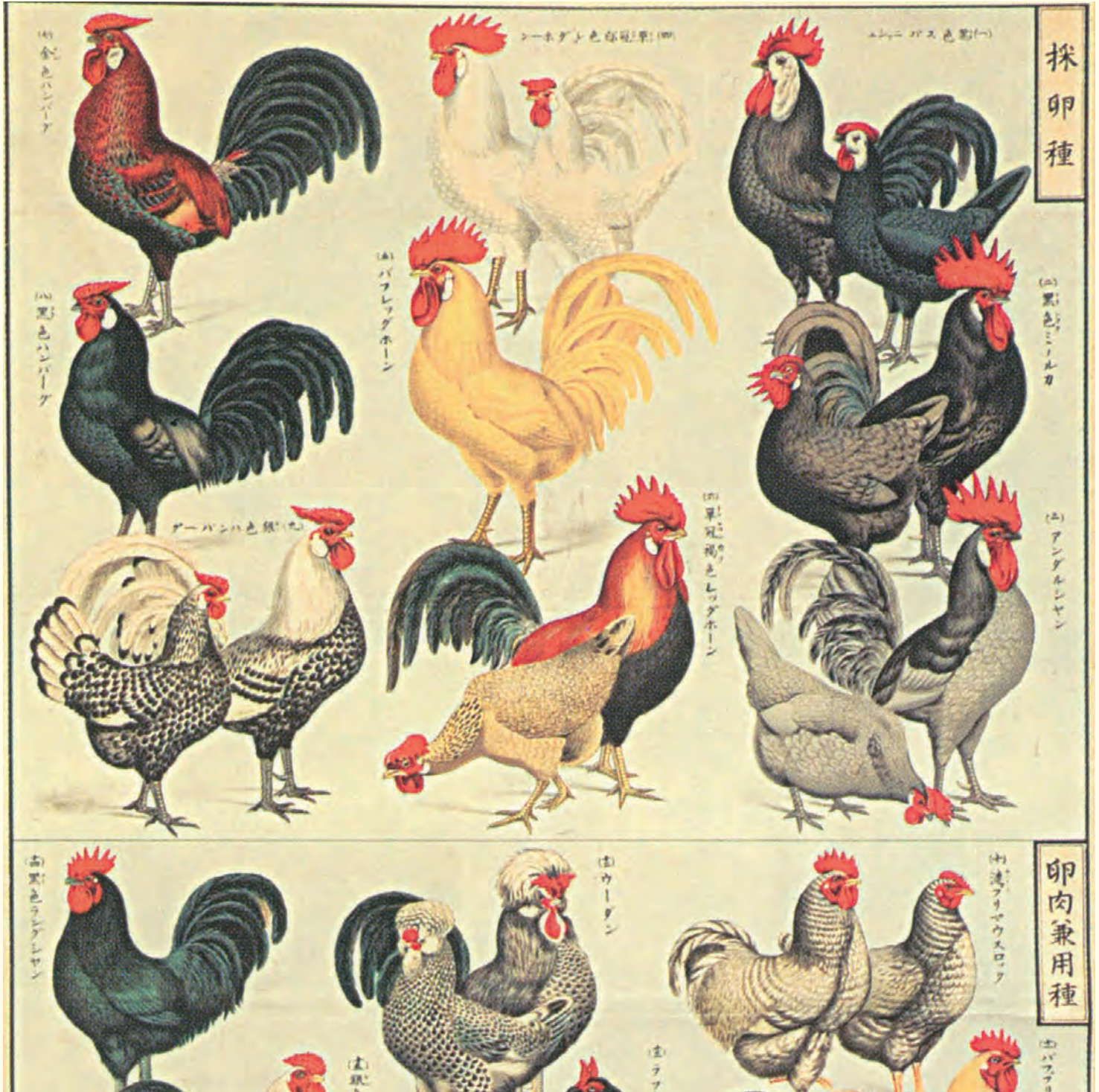


# 学内六報

2017.1.25

no.1491



肉も卵も愛玩も!

実業図画第一号「各種家禽写生図」(部分) / 東京大学総合研究博物館蔵



東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学定期株主総会ダイジェスト 「東大らしさ」とは何か?

113番元素発見にまつわる本学の貢献エピソード ニホニウムと東大

東京大学の新紹介ビデオ UTokyo/Society公開

## 第2期中期目標期間総決算 東京大学定期株主総会ダイジェスト

ステイク  
ホルダー  
との対話

## 東大らしさとは何か?

伊澤賢司さん  
新日本有限責任  
監査法人大日方隆  
総長補佐・経済学  
研究科教授平野浩之  
副理事・財務部長古谷研  
理事・副学長

**司会** ●たとえば近畿大学が顕著な例ですが、東大もブランド力を考えないといけない時期かと思います。その上で理解しておくべき東大らしさとは何かというのが今回のテーマです。いかがでしょうか。

## 研究者も学生も人が最大の資源

**岸下** ●僕が考える東大らしさは、人です。研究者でも学生でも人が最大の資源だと思います。すごい研究をしている人がいることだけでなく、どんな形で資源のインプットがあり、どう効率的にそれが行われているかも含めて東大らしさとしてアピールする必要があると思います。

**渥美** ●私がいる文学部は古い建物ですが、理系の建物は近代的で、理系のほうがお金があつて羨ましいな、と思っていました。入学前はガリ勉な人が多いのかなと思っていましたが、入ってみると、そんなことはないなというのが素直な実感です。私は勉強以外でがんばる学生と接する機

会が多いんですが、自分で目的意識をもって日々努力を重ねる人が多いと感じます。それが東大らしさかなと思います。

**司会** ●イチ公君からは事前にメッセージを預かりましたので、紹介します。「頭がっいいだけじゃない!スポーツでも活躍している東大生がたくさんいるワン!」。「アメリカンフットボール部は頭脳を活かして綿密かつ臨機応変に戦略的に戦っているワン!」。「男子ラクロス部は5年連続関東ベスト4だワン!」。「剣道部は前人未踏の全国学生剣道大会9連覇中だワン!」。「硬式野球部は2002年秋以来10年ぶりの勝ち点まであと一步のところまで迫ったワン!」。「第55回七大戦で、東京大学はなんと史上最高得点で総合優勝したワン!」。「頭だけでなくスポーツでもすごいのが東大らしさだということでしょうか。

**伊澤** ●岸下さんの言うとおりでですね。財務情報はお金が中心ですが、お金だけでなく、人もものも社会との関係も資本だ

と思うんです。私はある大学で講座をもっていますが、そこでは無償で働いています。お金の動きがないので財務情報には載りませんが、労力も大事な資本です。お金以外の諸資本の動きも幅広く説明していくと、社会からの理解が得られるんじゃないかなと思います。

**古谷** ●人については、140年の歴史のなかで、諸先輩の活躍ぶりが東大のイメージを形作っていると思います。ここ30年をみると東大出身者は官公庁以外にもどんどん進出していて、近年は外資系のコンサルタント業などに優秀な学生が進んでいますね。それが東大の新しいイメージをつくっていると思います。文理の差については、そうですね。正門と赤門の間にある新しい建物は基本的に文系です。赤門研究棟も文系。たまたま文学部は伝統的で重厚な建物だった、という理解でいかがでしょうか。歴史のある建物で学べるというのも一つの東大らしさですね。

## 第2期中期目標期間総決算東京大学定期株主総会・プログラム

2015年度決算報告 「決算報告及び第3期に向けた試みについて」 「附属病院事業報告」	青木志帆 (決算課専門員) 竹本浩伸 (附属病院経営戦略課長)
主催者挨拶	総長 五神真
基調講演 「東大が大学ディスクリージャー時代を拓く」	柴健次さん
パネルディスカッション「国立大学法人の見える化とディスクリージャー」	柴健次さん、伊澤賢司さん、大日方教授、平野副理事
ステイクホルダーとの対話「東大らしさって何?」	上の4人+古谷理事・副学長、イチ公、岸下さん、渥美さん

パネルでは、「東大はなんでも一番を目指す感じがある」「銀杏の臭さも東大らしさ」(大日方)、「予算配分の仕組みを部局も理解しているか否かが重要」(伊澤)、「大学の予算配分に全教職員が関わる必要はない」(柴)といった言葉もありました。

## もっと学生にも学内情報の開示を

**平野** ●一つお伝えしたいのは、予算配分システム改革の件です。従来は文理の別なく事業の提案を受けていて、話がわかりやすい理系の提案の方が、国に対する概算要求の上位にあがっていました。今回の改革で、文系は文系の提案、理系は

昨年10月15日のホームカミングデイにおいて、東大の財務状況をわかりやすく伝えるイベント「FINANCIAL REPORT 2015」が行われました(財務部決算課)。そのなかから、担当理事、財務部長、総長補佐、学外の有識者、学生、マスコットと、立場の違うパネリストたちが東大らしさをテーマに語り合ったパネルディスカッションの模様を、抽出してお届けします。内容に少しでも興味が湧いたら右の財務レポートやスペシャル動画をぜひご確認ください！



株主総会場で配布された平成27事業年度財務レポート。



**柴健次さん**  
関西大学会計  
学研究所教授

**岸下大樹さん**  
経済学研究科2年  
(動画\で山田先輩役)

**渥美真生さん**  
文学部4年  
(動画\で田中さん役)

**イチ公**  
東京大学運動会マスコット

理系の提案として、各々の上位の提案に配分される仕組みに変更しました。

**大日方**●気をつけないといけないのは、すごい人が揃うことを意識しすぎると、他から名のある人を採用して満足する結果になりがちということ。誰がいるかではなく、どういう素晴らしいパフォーマンスをする人がいるかが大事ですね。

**岸下**●東大らしさとは離れますが、学生に対して内部情報を出して理解を求める意識は少し不足していると思います。僕はTAとして活動して給料をいただいているが、時給は高くないです。背景には大学の財務状況があるはずで、そこは学生側も知っていたほうがいい。積極的に大学の情報を伝えてほしいですね。あと、動画では納得した感じでしたが、本当に運動会に出すお金はなかったんですか？

**古谷**●大事なステークホルダーである学生諸君に大学の財務状況を理解してもらえたらこれほどうれしいことはないです。財務状況を理解することは東京大学の活動を理解することですからね。国立大学の利益については、たとえば運動会にこれだけ出してよいかということ財務大臣と協議し、文科大臣が認めて初めて使えるものだ、というのがお答えです。

**平野**●ファイナンシャルレポート公開と総会はまだ2回目です。本当はこの場に

学生さんにも来てもらうのいいと思っています。来年以降は検討したいですね。

**司会**●さて、東大の特長を社会に伝えるにはどんなやり方が有効でしょうか。

**「マグロ大学」のような例示が必要**

**柴**●「マグロ大学」のようなショッキングな言い方があるといいでしょう。すでに成果は出していて、でもそれが認められていないのだとすれば、注目を集める刺激的な例示を出すべきだと思います。

**古谷**●一つの例示はノーベル賞でしょうか。たとえば大隅良典先生は東工大ですが、もとなった研究は本学在籍時のものですね。わかりやすい事例を使って丁寧に説明していくのがよいと思います。

**司会**●岸下さんに将来ノーベル賞を取っていただくのもいいですね。

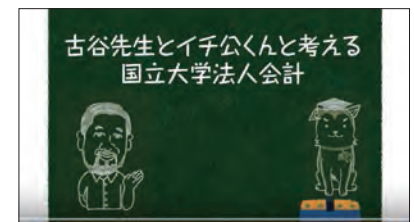
**大日方**●東大らしさで思うのは、卓越性と多様性です。私は去年から本部の仕事をしていますが、先生方は本当にすごい人ばかりです。そしていろいろな人がいる。多様性と卓越性を損なうことなく、うまく資源を配分して最適化していきたい。もっと財務力を磨き、研究者が無邪気に研究に打ち込めるようにしたいですね。

**古谷**●大学の活動を適切に公表し財務状況を知ってもらうことは私たちの重要な説明責任です。副題に「株主総会」と銘

打ったのは、株式会社における株主総会と同様にしっかりと説明していこうという思いから。大学が社会を駆動する新しいモデルを提示するためには、ディスクロージャーが不可欠です。皆さんのご意見とご支援をお待ちしています。(抄)

**スペシャル動画** **古谷先生とイチ公くんと考える国立大学法人会計**

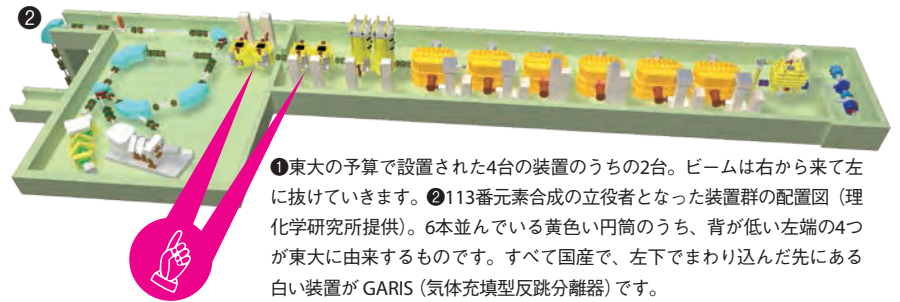
財政難に悩む運動会のイチ公と田中さんが、山田先輩に東大の決算書を見せられ、実は収益がたくさんあることに仰天し、鼻息荒く財務担当理事に掛け合いに行くも、正しい読み方を教えてもらって納得、という啓蒙色に富んだ約25分間。古谷先生の名演技が見物です。



[www.youtube.com/user/UTokyoPR](http://www.youtube.com/user/UTokyoPR)

アジア初の元素発見には本学の貢献も不可欠だった

# ニホニウムと東大。



①東大の予算で設置された4台の装置のうちの2台。ビームは右から来て左に抜けていきます。②113番元素合成の立役者となった装置群の配置図(理化学研究所提供)。6本並んでいる黄色い円筒のうち、背が低い左端の4つが東大に由来するものです。すべて国産で、左下でまわり込んだ先にある白い装置が GARIS (気体充填型反跳分離器) です。

## 新元素を生んだ2つの偶然とは?

原子番号が92番までの元素は1925年までに天然の物質から発見され、93番以降は人工的な方法で発見されてきました。超重元素と呼ばれる93番以降の元素を発見するには、ある原子核を加速してビームとし、別の原子核を標的として衝突させ、2つの原子核が一つになる融合反応を利用します。

我が国に於ける元素発見の研究の歴史は古く、戦前、小川正孝博士が惜しいところで逃した75番元素があります。加速器による原子核の研究では、仁科芳雄博士らによるサイクロトロン建設が第2次大戦中も続けられました。その後、東京大学附属原子核研究所(核研)、理化学研究所(理研)などで加速器による原子核実験が行われ、超重元素探索の機運も高まりました。超重元素を作り出すには重イオン加速器が必要です。1984年、理研から核研に教授として移った野村亨氏を中心に、GARISという装置を製作し理研に設置するプロジェクトが始まりました。その主要人物が当時九州大学院生で核研の委託学生だった森田浩介氏です。ただ、当時の加速器のビーム性能はGARISと合っておらず、超重元素探索はうまくいきませんでした。

ここで、歴史の偶然が訪れました。理研のRIBFという次世代加速器の建設が2000年頃から始まり、GARISの場所を動かさなければいけなくなったのです。行き先はRIBFの前段加速器であるリニアック(RILAC)からビームが出てくる所でした。これにより、GARISに入るビームも変わりました。リニアック加速器にRIBFの前段加速器という新たな役目が加わったため、イオンビームのエネルギーと

強度の向上がはかられ、6台の装置(IH型キャビティ)が付加されました。その副産物として、GARISに適したビームが入射されるようになり、性能が発揮されることになりました。

ここでもう一つの偶然が加わりました。それが東大に関わるものです。1997年、原子核科学研究センター(CNS)が核研を改組する形で設立されました。設立に伴う予算処置の中で、2000年度に上記の6台の装置のうち4台を東大の予算で設置したのです。この装置によりイオンビームのエネルギーは約2倍となり、RIBFが高い性能を出せるようになりました。一方、GARISへの入射ビームのエネルギーが上がったので、2つの原子核が融合できるようになりました。当初の目的はRIBFの性能向上でしたが、超重元素探索にプラスに働くことも予想されていたと考えられます。東大の寄与だけで実験ができたわけではないものの、これがなければデータは取れなかったといえましょう。GARISプロジェクト、RIBF建設を機にしたリニアック入射への切り替え、CNSのタイムリーな寄与などの成果と、背景にあった超重元素探索への連続的な指向、森田グループや理研加速器チームのためめ努力などが相まって113番に結びついたと言えます。

日本の加速器の水準は産学ともに極めて高く、113番元素の発見はその結実でもあります。その水準の高さは、常に広い視野と異なる時間スケールで原子核物理の発展を見ながら、研究を進めてきた厚みのある核物理コミュニティに源があります。これは基礎科学を発展させるために必要な要素の一つであるとも考えられます。すぐに成果を求めるのではなく、常に学問の基盤を高め続けることの重要性の証明を、ニホニウムの発見が与えているのではないのでしょうか。

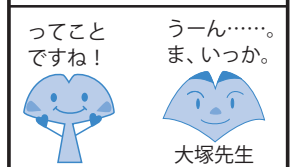
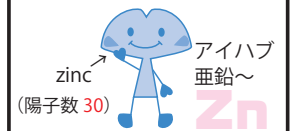


理学系研究科(物理学専攻)教授・原子核科学研究センター 前センター長

## 大塚孝治

～おまけマンガ～

いちろうんが考えた  
ニホニウム



～広報戦略企画室からのお知らせ～

東京大学  
新紹介ビデオ

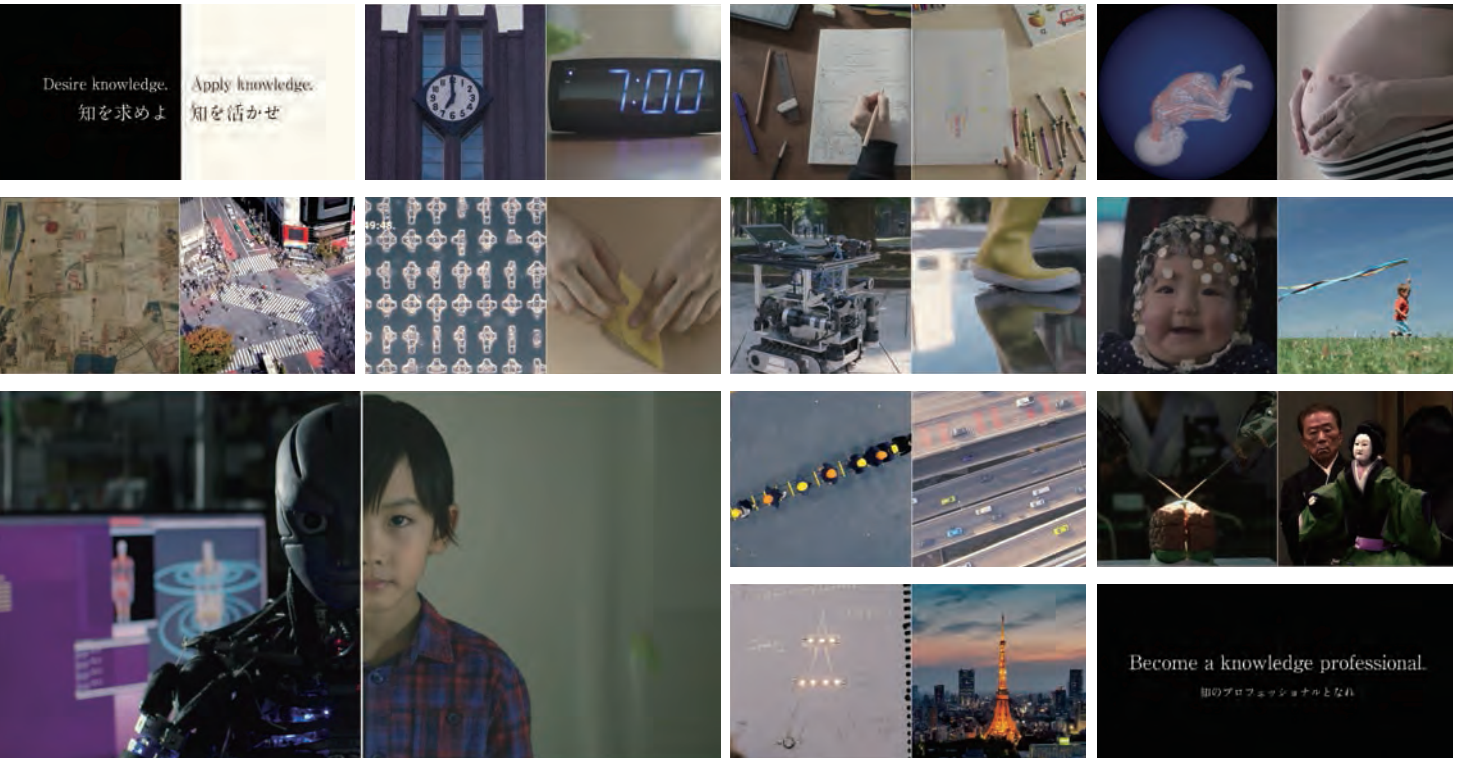


THE UNIVERSITY OF TOKYO

UTokyo/Society

を公開しました

このたび、広報活動の一環として東京大学の紹介ビデオを制作し、Youtubeの公式チャンネルで公開しました。国内外の皆さんに東大の魅力に気づいてもらおうという企図から、第一線で活躍する映像クリエイターの力を借りて完成した約2分間の映像は、繰り返し再生したくなること必至。周知と拡散にご協力を。



### 左は東大、右は社会の映像で構成

東大紹介ビデオ“UTokyo/Society”は、東京大学の魅力を広く国内外に伝えるための動画です。本学の「卓越性」と「多様性」を、言葉をほとんど使わず映像と音楽で表現しました。タイトルや冒頭のキャッチコピー「知を求めよ/知を活かせ」が示すように、作品の画面が左右に分かれており、左側が東京大学、右側が社会の映像で構成されます。東京大学の研究や教育が社会とつながりをもっており、貢献している様子を描いています。

作品は、朝から夜にかけて学問の対象となるスケールが徐々に大きくなり、また、個々の音が重なってメロディーになっていきます。海外の方が日本の大学であることをイメージしやすいように、読経の声やウグイスの鳴き声、ハチ公や根津神社の鳥居や人形浄瑠璃文楽、東京タワーなど日本の要素を多く盛り込みま

した。撮影させていただいた約20の研究室は、学内に協力依頼を出したところ応募いただいた研究室です。ご協力をいただきました教職員、学生の皆様に心から御礼を申し上げます。

この作品の別の側面の特徴は、学内の複数の部署が横串となって力を合わせ実現したという点です。国際本部の提案を皮切りに、総合研究博物館・洪恒夫特任教授（全体監修）や広報戦略本部広報戦略企画室（室長・理学系研究科 武田洋幸教授）がとりまとめ、「東京大学ビジョン2020」を表現する国際広報コンテンツになりました。制作は（株）ロボット<sup>\*1</sup>に依頼し、若手で活躍が目される上田大樹監督<sup>\*2</sup>を起用しました。

何度でも繰り返し見たいくなる東京大学の魅力を多くの方に楽しんでいただければ幸いです。



広報戦略企画室副室長・  
理学系研究科准教授

### 横山広美



制作に中心的に関わったメンバー。

→ [www.youtube.com/user/UTokyoPR](http://www.youtube.com/user/UTokyoPR)

※1 代表作に「つみきのいえ」「ALWAYS 三丁目の夕日」など。※2 代表作にいきものがかりや木村カエラのMVなど。



教養教育の現場から

第19回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 東京大学と国際連合の連携を促進する試み

／全学自由研究ゼミナール「国連と文化」「国連とインクルージョン」



お話／教養教育高度化機構  
国際連携部門 特任准教授

井筒 節

## 国連本部での経験を駒場へ

——井筒先生は元・国連職員だとか。

「10年ほどニューヨークの本部等において、2030年までの持続可能な開発目標(SDGs)に向けた取り組みを続けてきました。もともとは精神保健学分野の研究者です。メンタルヘルスや障害者の権利についてSDGsに含めることを目指してきて、それが一区切りついたので、次は後を託す若手の育成を、と考えました」

「昔はTVで明石康さんと緒方貞子さんの活躍がよく流れていましたが、いまは違いますね。国連というもののイメージが湧きにくくなっている。日本では若手職員の応募者も昔に比べて少ないです。国連に関する情報不足のせいだとすると、非常に残念です。国連という選択肢の存在を学生に提示するのが私の役割です」

——日本は拠出金の額では世界で2番目なのに職員数は少ないそうですね。

「実は昔から東大出身の職員は多いんです。現在の高須幸雄事務次長も東大出身ですし、歴代のリーダーには東大出身者が何人もいます。日本が国連に加盟して

60年。流れが途切れるのは損失ですね」

——さて、8月に行った集中講義「国連と文化」についてご紹介ください。

「文化や芸術を通して国連を捉えてもらうとニューヨークで行ったプログラムです。約80人から選ばれた学生12人が、ユニセフ、国連開発計画(UNDP)、人道問題調整事務所、日本政府代表部など、様々な人と話し合う一方、現地の文化を鑑賞し、国連への提言を作成しました。参加した学生たちはUNiTeという団体をつくっていても活動しています。持続的に取り組んでいるのがうれしいですね」

## 難しい精神障害の問題を考える

——「国連とインクルージョン」というタイトルの授業も実施されましたね。

「SDGsの最大テーマは「leaving no one behind」。今回はマイノリティの中でも取り残されがちな精神障害者に注目しました。国連でも精神障害の扱いは難しく、精神障害を英語で何と呼ぶかの共通理解もまだ。一番難しい問題を考えてもらうため、関連の国連機関からゲストを呼んで話してもらい、最後2回は受講者約20

人での討論でした。UNDPの方との議論では、ビジネスとの連携で、障害をめぐり、お金になる仕組みがないと持続的支援は無理、障害者とお金を語るのを悪とみなすこと自体失礼、経済効率で考えるのは問題、などの議論が印象的でした」

——国連との連携の主な意義は、優秀な人材の供給、ということでしょうか。

「修士号と2年の勤務経験が必須なので、すぐに国連職員を育てるのは難しい。でも、若い頃に途上国の現場を見聞して共感した経験があるか否かは、どの分野でも上に立つ人にとっては大事です。また、東大には膨大な専門知があり、その知見は様々な形で国連に伝えていくべきだと思います。それを国連側も求めています」

「ダグ・ハマースホルド第2代事務総長は、国連は人々を天国に導くのではなく人々を地獄から救うためにある、という言葉を残しました。多様な文化があるなかで最大公約数を見つける場が国連です。いま、全ての国が合意できるラインがどこかを示すことは貴重です。そこを踏まえて働けるかどうか。多くの学生が国連に目を向けることを願っています」

## 「国連と文化」ゲスト(一部)

国連事務局広報局 Jeffrey Brez さん

国連事務局軍縮部 松野秀樹さん

国連事務局人道問題調整事務所 Martijn Dalhuijsen さん、澤田泰子さん

国連児童基金 大久保智夫さん

国連人口基金 Azza Karam さん

国連開発計画 薬師弘幸さん

## 「国連とインクルージョン」ゲスト(一部)

元国連大学 堤教朗さん

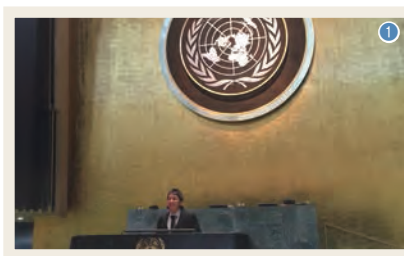
国際協力機構 久野研二さん、曾田夏記さん

日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 高久陽介さん

国連開発計画 青柳仁士さん

国連児童基金 佐々木佑さん

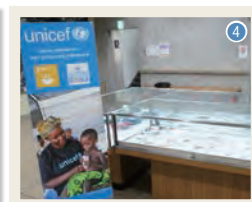
精神障害者当事者会 山田悠平さん



①国連NY本部の総会議場。一般人が演台に立てる機会は貴重。



②国連NY本部での国連職員による講義。③UNICEF事務局次長らとの討論(@KOMCEE west)。④UNiTeが駒場図書館で行った展示「国連×東大」。



## ワタシのオシゴト 第130回

RELAY COLUMN

新領域創成科学研究科事務部  
副事務長(総務担当) 齊藤直樹

## 「カシワヨイトコ」

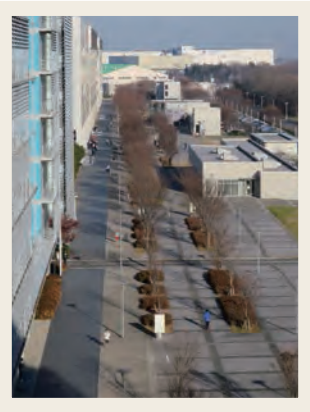


職場にて。

五六郎池でカワセミを見た。柏キャンパスは緑近い広い敷地を持ち、その割には人や建物が少ない所だ。最初は戸惑いもしたが、人混みが苦手な植物や生物に興味のある私には好環境である。新領域は、ここを基点に日夜研究を行っている。

総務担当副事務長として3年目、危機管理、評価分析、コンプライアンス、防災、情報公開や総務系の相談相手等、総務系の非日常・非定型業務を主に担当している。総務係は日々多量の案件処理に追われ常に忙しいが、私はのんびり散策……と言いたいところだが、お陰様であまり暇を持って余すようなことが無い。ともあれ、気持ちの良い環境で活気ある部局の仕事が出来ることには、多少の幸運と優越感を感じる。

蛇足になるが、柏キャンパスでは、柏共通事務センターと在住部局事務系職員の親睦会や連絡会があり、仕事上の情報交換も気軽に行える。大変良いことだと思う。



柏キャンパスでの駅伝大会風景。

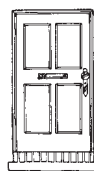
得意ワザ：ツッコミ&amp;茶々入れ

自分の性格：博愛主義でロマンティスト

次回執筆者のご指名：物性研 矢口総務係長

次回執筆者との関係：お隣部局の現・親睦会幹事長、かつての職場仲間

次回執筆者の紹介：熱いロック魂を内に秘める物静かで頼れる男



## 決算のD O O R

～リロード～

数字が導く東京大学の未来

第9回

## IRってなんだろう？

新年あけましておめでとうございます！

昨年は熊本地震や英国のEU離脱、米国の大統領選など国内外とも混乱の一年でしたが、今年はさらに波乱万丈な年となるかもしれません。そのような中でも東京大学が教育・研究の質をあげ、未来社会の期待に応える大学であり続けるには経営基盤の強化は必要不可欠です。が、基盤となる運営費交付金等は法人化当初から減少傾向なことはご存知のとおり。29年度予算案では国立大学法人全体で若干増えたものの（対前年度25億円増の1兆970億円）、もはや限界。そのため、学内資源（ヒト、モノ、カネ）の有効活用と多様な財源獲得が至上命題なのですが、「事件は会議室で起きてるんじゃない！現場で起きてるんだ」。教育は学生さんが集う講義室やゼミ室で、発明発見は先生方の研究室や実験室で生み出されます。現場の活動実態の正確な把握なしに、効果的な資源配分や財源獲得のための戦略を立てることはできません。しかし、既存の財務諸表だけでは大学全体の継続性や健全性は測れても、それぞれの教育研究活動の成長性、有効性の把握は難しい。

そこで登場するのが、IR。IR (Institutional Research) とは、大学の運営に役立つ情報を提供する役割を果たす機能のことで、企業でいう Investor Relations (投資情報) でも、今話題の Integrated Resort (統合型リゾート) でもありません。しかも「情報」には財務情報だけでなく、教育情報（例：外国語による授業科目数、都道府県別合格女子占有率）、研究情報（例：論文被引用数、国際共著率）、人事情報（例：TA・RA採用人数、外国人教員・研究者数）などの非財務情報も含まれます。これら情報を収集し、組み合わせ、分析することで、大学の強み弱みを把握し、資源投入先の判断や、投資有効性の評価の資料となるのです。言わば IR活動は大学の「健康診断」。例えば、THE (英国の教育専門誌) によるアジア大学ランキングで3年連続首位だった東大がなぜ7位になったのか？ TA・RA等学生支援制度の効果は何か？ これらの問いに科学的根拠資料をお示することも、また IR活動で得られた豊富な情報の活用により説明責任が向上し、資金提供者からの多大な信頼と協力を得ることも、可能性は未知数です。

と、なにやら良いこと尽くめなのですが、学内に眠っている膨大な情報をどう整備し、組み合わせ、分析すればよいかはまだ手探り足探り。IRは国立大学改革の「最終兵器」となりうるのか。期待と不安が入り混じる中、IRデータ室の4月オープンに向け、準備作業真っ只中なのです。(青)

本部決算課(内線22136) kessanka.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

# Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学協創推進本部

第133回

## 大学と企業のよりよい連携のためのシンポジウムを開催

【平成28年度文部科学省産学官連携リスクマネジメントモデル事業】大学と企業のより良い連携のための『リスクマネジメント』と『ガイドライン』-利益相反マネジメント、知財マネジメント、営業秘密マネジメントなどを題材に-というシンポジウムが2016年12月9日に東京大学の主催で山上会館にて開催されましたので、その概要を報告します。

第1部及び第2部では「利益相反モデル事業：海外における利益相反マネジメントの考え方」として、Harvard大学のAra Tahmassian氏および医学系大学であるJohns Hopkins大学のJulie Gottlieb氏の講演及びQ&Aがあり、米国の大学における利益相反マネジメントの手法が紹介されました。講演では、産学連携活動において、大学の社会的信頼が毀損しないように、リスクマネジメントすることが重要である旨が改めて確認されました。

第3部では、「産学連携ガイドラインの概要と運用」のパネル討論会がありました。

「産学連携ガイドライン」は文科省および経産省が共同で産学官連携による共同研究強化の指針として、①産学連携本部機能の強化、②共同研究額の拡大、③「産学連携の促進」のためのリスクマネジメント、④クロスアポイント制度等による人材の好循環、を示しています。なお、実際の運用は、共同研究担当者に委ねられており、この内容が強制されるといったものではありません。経団連からも個別具体的に大学と協議して進めていくとの発言がありました。

パネル討論会では、東北大学から、東北大学における利益相反マネジメント体制の説明があり、特に医療系の利益相反マネジメントに苦慮しているとの報告がありました。また、経団連からは、共同研究における間接経費の明確化が要請され、大学側は、大まかな内訳であれば明確化できるのではないかとのことでした。さらに、東京農工大学からは、秘密情報の管理について、①秘密情報に触れる関係者を限定する、②秘密情報はカギをかけて保管する、③秘密情報として保管する期間を明確化する、という基本的な管理が重要であることが指摘されました。

今後、クロスアポイント制度の導入や、産学連携活動の進展に伴い、リスクの増加や複雑化が進みますので、これらを適切にマネジメントする重要性は増々増加していきます。これらさまざまなリスクを適正かつ柔軟にマネジメントする対応策が、喫緊の課題です。

産学協創推進本部 [www.ducr.u-tokyo.ac.jp/](http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/)

# 留学生さん いらっしやい!

第34回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



 オランダ

アンエル・デ・ヨンさん

Anner de Jong

工学系研究科精密工学専攻  
修士2年

オランダ出身。日本の予備知識がないまま留学。理解に苦しむ事も多いようですが、今では日本食や伝統芸能を楽しむほどに。それでも東京の暑い夏は苦手。

## Q. 日本・東大に来たのはどうして?



母国は小さな国なので外の世界を見たかったんです。シンガポールへ交換留学して、その後ギャップイヤーにアイルランドで英語力を磨きながら世界の大学に出願しました。イタリアと日本の大学から返事がきたのですが、文化のまったく異なる日本を選びました。東大を選んだのは学際的な勉強ができるからです。

## Q. いま何を研究しているの?

機械に学習させるプログラミングを研究しています。様々な課題に対する答えをアルゴリズムに学習させて、新しい課題に対応させるのです。今は参考文献に当たりながら試行錯誤しています。将来は実社会で働きたいです。東大の就活イベントにも興味があります。



## Q. 日本・東大で困ったことは?



日本語は難しいですね。工学部の日本語教室で勉強していますが、敬語とか大変です。日本人は丁寧すぎたり、あいまいだったり、不思議です(笑)。東大は英語で受けられる授業の種類も数もまだまだ少ない気がします。

## Q. 東大・日本の好きなのところは?

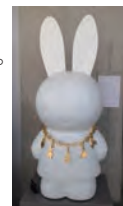
日本はオランダと全然違って面白いです。効率的ですべてがうまく動いていて感心します。日本食は食べるのも作るのも好きですね。



## Q. オランダについて教えて



ハーレムという町で育ちました。NYのハーレムの由来になった所です。そういえば、日本で有名なミッフィーの出身地が実はオランダだと知っていましたか?写真はミッフィー博物館で撮影したものです。博物館には日本人がたくさんいましたよ。



協力：国際センター本郷オフィス



## インタープリターズ・第114回 バイブル

総合文化研究科教授 長谷川壽一  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

### 科学離れは止まったのか?

本インタープリター養成プログラムがスタートしたのは2005年、早11年の月日が経過した。設立当時の代表の黒田玲子先生、その後を引継がれた石浦章一先生は定年され、いつの間にか私が現役最年長教員である。というわけで、今年度の本プログラム「基礎論」講義では、歴史を振り返り本プログラムの総括を試みた。

黒田先生が書かれた設立趣旨には「わたしたちは、日常生活のあらゆるところで科学技術の恩恵を受けています。でもその一方で、複雑化する科学技術への心理的な距離は遠くなるばかり。世の中の科学離れも進んでいます。このままでは、科学技術と社会との関係はバランスを失い、進むべき道を誤りかねません。そこで生まれたのが、科学技術インタープリター養成プログラムです」とある。では、11年をかけて本プログラムは科学離れを少しでも止められたのか? この問いを受講者諸君と考えることにした。

本プログラムは11期までに114名の受講生を数え、修了者は研究職としてだけでなく、省庁や出版社などで科学と社会を繋ぐ役割を担っている。本プログラムを通じて修了者自身の意識が大きく変わったことは、HPのビデオを見ればすぐにわかる。しかし、本プログラムが社会を変えるほどのインパクトがあったのか。実はその実証的効果測定はなされていない。

2000年代半ば、科学離れを示すさまざまなデータが世を賑わした。当時、科学技術基礎概念調査の平均正答率で日本は54%、米国や北欧、英独仏伊より低く、科学リテラシーの低さが嘆かれた。しかし、その後の追跡調査は行われていない。2004年、科学技術情報に対する関心度調査では、40~60歳代と比して20~30歳代の関心度は格段に低く、若者の科学離れはたしかに深刻であった。がその後、若者の意識が改善したかどうかのデータは公表されていない。この10年間、インターネットを通じて科学技術情報に接する機会は格段に増えたことは間違いがないが、科学書がベストセラーになることはめっきり減り、科学雑誌はいまや風前のともしびである。科学離れに歯止めがかかったという証拠も実感もない昨今である。自分自身の課題でもあるが、「科学離れ」の今日的検証が求められている。

科学技術インタープリター養成プログラム  
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

## 救援・復興支援室 より 第63回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

### 救援・復興支援室の活動(12~2月)

12~2月 岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア

### ザシキワラシの日常<sup>(37)</sup>

本部企画課係長(遠野分室勤務) 文: 佐藤克憲

岩手県釜石市において、震災前は「希望学」に関する調査を行い、震災後は本学の同市復興支援活動の中心として、人材育成のための講演や講習会等を行ってきた社会科学研究所。同研究所では、昨年度中に新たな全所的プロジェクト研究として「危機対応の社会科学的研究」を立ち上げることが決まっていたところ、釜石市から同研究所へ「復興の過程で被災地が直面してきた様々な問題点を整理し、これに対する対策を学際的に検討する『総合的な調査研究』を実施して欲しい」旨の要請がありました。これを受けて同研究所では、危機対応調査などの研究拠点として「危機対応研究センター」開設の検討・準備を進め、昨年11月14日に釜石市との間でセンター開設に関する覚書を締結しました。そして、同日夜には「危機対応学」シンポジウムが開催され、私はこちらを視察してきました。

玄田同研究所教授(危機対応研究センター長)から、「希望学」との関係を含めた「危機対応学」についての説明等があった後、釜石市内で漁業復興や農業振興、地域コミュニティーづくりなどに取り組む団体や行政の関係者6名から、「『日頃』の『活動』を象徴するもの」、「活動の中の『危機』や『ピンチ』」、「これからの『希望』を表現するもの」の写真各1枚ずつを示しながらの活動紹介と、それに対する意見交換が行われました。「地域ぐるみの『何とかしよう』という力が危機対応に役立つ」、「危機対応の上でも『縁』が大切」等の活発な意見交換がなされ、私を含む約90名の参加者の多くの方が、釜石の将来と危機対応学の成果に大きな期待を持ったのではないかとと思っています。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)進行役の玄田危機対応研究センター長。(右)活動発表の一コマ(昨年8月末の豪雨被害関係)。

www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\_j.html  
kyuenfukkou.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp 内線: 21750 (本部企画課)

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
12月9日	カブリ数物連携宇宙研究機構、物性研究所、宇宙線研究所	「やっぱり物理が好き！～物理に進んだ女子学生・院生のキャリア～」を開催	11月19日
12月16日	本部広報課	東京大学ー日本サッカー協会連携協定締結記念式典を開催	12月16日
12月26日	本部総務課	2016年度業務改革総長賞表彰式	12月16日
12月27日	広報室	第5回国際広報勉強会で The Conversation について学びました	12月21日
12月27日	国際本部	北京大学・清華大学での職員研修の実施	11月27日
12月28日	サステナブルキャンパスプロジェクト室	日本最大級の環境展示会（エコプロ2016 環境とエネルギーの未来展）にTSCP学生委員会が参加しました	12月8日
1月1日	広報室	2017年五神総長年頭挨拶	1月1日
1月4日	教育学研究科・教育学部	平成28年度教職課程・学芸員等実習報告会及び懇談会を開催	12月19日

## お知らせ

全学ホームページの「お知らせ」等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
12月7日	広報室	本年5月11日の事件に係る学生懲戒処分について	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00017.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00017.html</a>
12月9日	本部総務課	平成28年度東京大学学位記授与式・卒業式について	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1301_00011.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1301_00011.html</a>
12月9日	本部総務課	平成29年度東京大学入学式について	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1301_00012.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1301_00012.html</a>
12月19日	本部広報課	退職教員の最終講義（1月開催分）	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00032.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00032.html</a>
1月11日	附属図書館	平成29年度の総合図書館の代替サービスについて（第3報）	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1901_00003.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1901_00003.html</a>

## 五神総長年頭挨拶

明けましておめでとうございます。

新しい年を迎えるにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

一昨年の梶田隆章特別栄誉教授のノーベル物理学賞に続き、昨年、東京工業大学栄誉教授の大隅良典先生がノーベル生理学・医学賞を受賞されたことは、本学としても大変喜ばしいことでした。大隅先生は、本学教養学部を卒業され、理学系研究科で博士号を取得された後、ロックフェラー大学に研究員としての滞りを経て、理学部で助手・講師をつとめ、ご出身の教養学部では助教授として研究・教育に従事されました。今回の受賞のテーマであるオートファジーの研究は、助教授時代の発見が端緒となったもので、大隅先生のノーベル賞受賞は本学にとって大きな誇りです。

東京大学は今年の春で創立140年を迎えます。この間、情報通信技術や高速輸送技術など科学技術は飛躍的に進歩し、人間の暮らしや社会の様相は大きく変わりました。世界中の出来事を瞬時に

知ることができ、人々の活動は国境を越え、地球全体に広がっています。しかし、その一方で、資源の枯渇、地球環境破壊、世界金融不安、地域間格差、宗教対立の深刻化など、人類全体の課題が複雑さと深刻さを増していることも忘れてはなりません。こうした新たな様相を見せる難題を前に、人類が創り上げ良き伝統として守ってきた社会や経済や国際政治を支える基本的な仕組みが十分に機能しなくなっていると感じます。

2016年は、正月の世界的な金融不安から始まり、世界各地での大規模テロの頻発、イギリスの国民投票におけるEU離脱の意思表示、アメリカの大統領選挙とその波紋など、人類社会にとって大きな意味をもつさまざまな出来事とともに過ぎた一年でした。あるいは後世の人々が歴史を顧みて、人類社会の転換点となる年だったと振り返ることになるかも知れません。

残念なことに世界では、人間の知性に対する絶望も語られています。知のもつ力を否定するよう

な動きも目立つようになってきました。しかし、より良い人類社会を創るために、今、大学が果たすべき重要な役割を放棄するわけにはいきません。向うべき方向について、ビジョンを共有し、知恵を絞り、協力し合うことで、知性への信頼を高め、そして、新たな社会や経済の仕組みを提示していかなければなりません。

大切なことは、知の多様性です。異なる考えを持った人々が互いに尊重し、協働し、それを推進力とするのです。創立以来、東西文化を融合しつつ、新しい知を作り上げてきたことこそが東京大学の伝統であり、本学が今、次の70年に向けて、このアクションの中心的役割を担うべきだと考えています。

そのために、全学の構成員と総力を結集し、いっそう力強く行動していきたいと思っております。皆様の温かいご支援、ご協力をお願いいたします。

最後に、この一年が皆様にとってより良い年となることを、心よりお祈り申し上げます。

（1月1日 全学ウェブサイトに掲載）



**CLOSE UP**



総長から表彰状を受け取る受賞者。



受賞者記念撮影。

**2016年度業務改革総長賞表彰式を開催** (本部総務課)

東京大学業務改革総長賞表彰式が、12月16日に大講堂(安田講堂)で開催されました。表彰式では、業務改革推進室が全教職員を対象に募集した業務改革課題のうち、厳正なる選考により選出された総長賞2課題、理事賞2課題、特別賞1課題に対し、五神総長及び戸波理事(業務改革担当)から表彰状と副賞が授与されました。

●総長賞

「附属病院・多職種で目指す英語対応能力向上への取り組み一書籍『東大病院発!医療スタッフのための英会話』の発刊」/英語マニュアル作成・出版プロジェクトチーム(代表者:岡陽介)

「図書館ツアーのセルフ化に伴う業務削減と学生・留学生サービスの向上」/農学系総務課図書

チーム(代表者:新見慎子)

●理事賞

「国立大学法人会計出前講座(入門編)」/本部決算課(代表者:青木志帆)

「省エネ第3弾リアルタイムの情報共有で節電!!」/医学部附属病院管理課施設管理チーム(代表者:三井亮平)

●特別賞

「大学グローバル化へのWin-Winプロジェクト」/カブリ数物連携宇宙研究機構(代表者:田村利恵子)表彰に引き続き、五神総長による講話、受賞者によるプレゼンテーションが行われました。約380名の教職員が参加、受賞を祝うとともに、優れた業務改革のアイデアを共有しました。

**CLOSE UP**



TSCP学生委員会メンバーたち(一部)。

**TSCP学生委員会が環境展示会に参加** (サステナブルキャンパスプロジェクト室)

日本最大級の環境展示会であるエコプロ2016環境とエネルギーの未来展が、12月8日~10日に開催されました。東京大学からは、東大サステナブルキャンパスプロジェクト室(TSCP室)の構成員であるTSCP学生委員会(2015年7月発足)の学生達が主となって参加し、当プロジェクトの紹介、TSCP室の取り組み、今後の活動などを広く紹介しました。子供から年配者まで幅広い方がブースにお越し頂き、本

学の学生達の説明に熱心に耳を傾け、有意義なご意見も多数頂戴致しました。また、学生達にとっては展示準備から説明まで取り組めたことで、大学内では学べない貴重な体験活動になりました。今後もこうしたイベント等を通して、大学自らによる様々な地球温暖化対策と環境配慮を広く紹介する事により、関係機関への波及効果も含め地球温暖化対策への大学の行動を示していきたいと考えております。

**CLOSE UP**



当日はあいにくの悪天候でしたが、33名の参加がありました。



施設見学の様子。

**物理を学ぶ女子学生のキャリアを考えるイベントを開催** (カブリ数物連携宇宙研究機構ほか)

11月19日、カブリ数物連携宇宙研究機構(Kavli IPMU)と物性研究所、宇宙線研究所の主催により、物理を学ぶ女子学部生及び女子大学院生の支援を目的に「やっぱり物理が好き!~物理に進んだ女子学生・院生のキャリア~」をKavli IPMU棟で開催しました。物理学科出身の講師を招いてキャリアパスを提示すると共に、参加者同士のネットワーク作りや物理学分野の魅力伝える機会として行われたイベントです。

午前の中でミニ講演を行った4名の講師は、大学時代に物理を学んだという共通性を持ちつつも、現在は国内外の研究機関や企業での研究、本の編集といった様々なキャリアに進んでおり、物理学科出身者が多様な道に進んでいる事例を

直接聞くことの出来る内容となりました。

午後には2名の講師による講演が行われました。村山斉Kavli IPMU機構長は「物理に進んで見えてきたこと-宇宙研究最前線と女性研究者の活躍」、丹治はるか電気通信大学准教授は「殻から出てみて見えたもの-米国大学院への留学とその後」と題した講演でした。

施設見学では、参加者が4班に分かれてKavli IPMUと物性研究所、宇宙線研究所の3機関を回りました。特に、物性研究所では大学院生スタッフが参加者に研究装置の説明を行う姿も見られました。最後に行われた交流会では、参加者や講師がお茶やお菓子を片手に話し込み、イベントは盛況のうちに終了しました。

**表紙について**

実は本誌には新年1号目の表紙に干支の動物にまつわる画像を掲載する伝統があります(1978年1月発行の392号から)。吉例に則り、今回は、総合研究博物館が所蔵する「各種家禽写生図 農科大学教授農学博士本田幸介先生図案並二説明」を掲載しました。1903(明治36)年に出版された教育用の掛図です。縦181.2×横61.0センチというサイズの軸装に、「金色ハンバーグ」などの採卵種、「ウーダン」などの卵肉兼用種、「暗色ブラマ」などの肉用種、「長尾鶏」など

の愛玩種と、合計33種が石版多色刷で印刷されています。殖産興業政策の下、産業や技術に関する最先端の情報を学生に伝える教材として使われていたようです。図案と説明を担当した本田幸介博士は、明治から昭和初期にかけて活躍した農学者。1906年に帝国大学農科大学教授となり、畜産学の講座を担当、1907年には大学での講義をもとにした『養鶏学講義』を上梓しています。さて、新年。この掛図や鶏やその他の鳥に興味があれば、東京大学130周年記念特別展示「鳥のピオソフィア」の図録『鳥学大全』(2008年)を眺めてみてはいかがでしょうか。





## 東大生はタフになったのか

箱根駅伝は正月の風物詩である。この駅伝に東大チームが出場したことがある。1984年の60回記念大会で出場枠が増えたこともあるが、それ以上に当時の駅伝チームが数年計画で本気で練習に取り組んだ結果でもある。

私が入部したのは1978年。先輩たちの活躍で東大陸上部は関東学生選手権の一部に昇格したばかりだった。この頃の陸上部には8年生を筆頭に様々なツワ者がいた。各学部のいろんな出身校の部員が記録更新をめざして自分の頭で考えながら自己研鑽していた。いい加減そうでも試合前には集中力を高め必ず試合に勝つ「ここぞという時に頼りになる」先輩がいた。他校の一流選手を相手に彼らの活躍で一部校の座を3年間守り抜いたが、私たちが4年生の時に二部に落としてしまった。

田舎の県立高校出身の私にとって“この東大”は想定外のスケールだった。入部当初の私はプレッシャーに弱く試合で記録を出せず先輩にボロクソ言われて悩んでいたが、選手層の薄い<sup>とうてき</sup>投擲を始めて“開き直り法”を覚えると記録が伸び、上級生になると十種競技ができるようになっていた。自分の人間的成長は東大陸上部で培われたといっても過

言でない。この4年間で学んだ「人間のスケール感」は人生の大きな財産になった。

学部卒業後、私は大学院に進学し、運よく地方大学の助手になった。大学教員歴は今年で33年、うち半分は東大である。この間、私は専門教育に加えて常に「人間のスケール感」を意識しながら学生と接してきた。

さて、東大生はタフになったのか？ここの年くらいを境に流れが大きく変わったように思う。女子学生は確かにタフになった。アフリカやフィリピンの山奥に単身で乗り込んで活躍していたりする。それに比べて男子学生の不甲斐なさが気になる。自立できていないのである。東大男子は駒場時代にもっと冒険して、多様な人間に出会い、とことん衝突して、失敗し、それを克服する訓練が必要だ。それができないなら家事をこなせる良き夫として女子のサポートに徹したほうがよい。

とは言えこれは元運動会東大生の戯言。今は昔とは違う。現役東大生には新時代に適した道を開拓してほしい。

溝口勝  
(農学生命科学研究科)